白い玉

greentea0117

白い玉

　あるところに鬼がいました。鬼は悩んでいました。腹が減ったので山のふもとの村を襲おうと思っています。ところがこの春、この村では赤ん坊が四人も生まれました。物蔭から見たところ、赤ん坊は罪深いところが全くありません。鬼の中にいつも燃えている憎しみの炎さえ、吹き消してしまいそう。
　それで鬼は山奥の岩に肘をついて、考えていたのです。大人だけ襲うか？　でも大人がいなくなったら赤ん坊は生きていけない。別の村を襲うか？　でもそこは別の鬼の縄張りだから、報復をうけることになるだろう。
　俺も年を取ったんだろうか。鬼はひとりごちました。赤ん坊ごときに骨抜きにされる自分ではなかったはず。鬼は草をはみました。考えるのに疲れてねむってしまいました。
　ふと目覚めると夜でした。少し欠けた月がこうこうと地上を照らしています。
「もう食い物のことを考えるのはやめよう。飽きた。鬼ごとき、食わんでも死にはせんだろう。不甲斐ないが、こうしてごろごろとして季節が過ぎていくのを眺めるのも鬼らしいといえば鬼らしい」
　鬼はそう自分に言い聞かせ、じっと月を眺めていました。だんだんと月が団子のように思えてきます。
「む、いかん、やっぱり考えてしまう。あのくらいの大きさのもちを食べられたらなあ」
　ずっと眺めていると、月でうさぎが餅つき大会をしているのが見えてきました。ぺったんぺったん、やけにおいしそうです。
「ひとっぱしり月まででかけてこよう。鬼に餅をわけてくれないという法はないだろう」
　そこで鬼は竜が住む山を探しに出かけることにしました。竜は鬼の計画を聞き、面白いと思いました。月へ行くなんてどうして自分でも思いつかなかったのでしょう。
「昨日、うさぎが餅つきをしていた。今日の夜でかけよう。きっとまだやってるはずだから」
　鬼は言いました。竜は鬼をのせて飛び立ちました。ところが鬼はとても重くて月までたどり着けそうにありません。
「うーむ」
　竜は考えました。
「あんたをおろして一人で行こう。餅は持って帰ってやるよ」
「いや」
　鬼は言います。
「あそこでついている餅をここに持ってくることなどできるもんか」
「やってみないとわからない」

　竜は飛び立ちました。鬼は月を見上げ、どんどん小さくなる竜を見ていました。やがて夜が明け、月が白く薄いせんべいのようになったころ、竜がもどってきました。
「おーい、どうだった？」
　鬼は待ちかねてどなりました。竜の両の爪は宝玉のように白い玉をつかんでいます。餅だ！鬼は思いました。竜はそれを鬼に投げつけました。白い玉はポン、と弾け煙がもくもくと立ちました。
「どういうことだ、これは！」
　鬼はどなりました。
「月のうさぎが言うには、お前は鬼にしてはあまりにたよりないとさ」
　気づけば鬼は毛むくじゃらの人間になっていました。
「だましたな！」
「飢え死にするよりましだろう。お前がいくじなしだからさ。せいぜい人間として生きてくんだな」
「くそう！」
　鬼は地団太を踏みました。